

A ñ
é ß

STARTER STORY ・ JAPANESE ・ C1

かすかな遅れ

かすかな遅れ

生田駅のホームの端には、大正の終わりから動き続けている大きな柱時計がある。象牙色に焼けた文字盤に、無数の細い傷が走っていた。今ではこの路線で唯一残る、機械式の駅時計だった。

時計を診るのは岩田修平という、八十を三つ超えた老人だった。かつて鉄道会社に技術者として勤め、定年をとうに過ぎた今も、月に一度だけこの駅に通い続けている。頼まれてしているというより、もう体に染みついた習慣に近かった。

生田は一日に十数本しか電車の来ない終着駅で、来春には無人化されることが決まっていた。改札の脇には、電光掲示板を新設するという工事の告知が、すでに貼り出されている。柱時計は、その紙の隣でひっそりと時を刻み続けていた。

岩田は月末になると小さな革の鞆を提げてやってきて、時計の裏蓋を開ける。歯車に薄く油を差し、ぜんまいを巻き、埃を払う。作業そのものは十分もあれば終わるのに、彼はいつも一時間近くをホームで過ごしていった。

今日、駅長代理として赴任してきたばかりの若い女性、宮下がその作業を眺めていた。「岩田さん、この時計、いつも二分ほど遅れていますよね」と彼女は言った。

「調整すれば、すぐに合うと思うんですが」

岩田は手を止めずに答えた。「知っています」とだけ言い、それ以上は何も説明しなかった。宮下は怪訝そうな顔をしたが、老人の横顔があまりに静かだったので、それきり尋ねるのをやめた。

その夜、宮下は駅の古い記録簿を整理していて、岩田の名前が三十年以上前から点検記録に記されているのを見つけた。同じ筆跡で、同じ几帳面さで、月に一度、判で押したように書き込まれている。「異常なし」の四文字だけが、何百回と繰り返されていた。

数日後、宮下は本社から届いた撤去計画書に目を通した。柱時計は文化財としての価値を検討されたが、結局は「維持コストに見合わない」という一文で片づけられていた。撤去は来月の初めと決まっていた。

宮下はそのことを岩田に伝えるべきか迷った末、次に彼が来た日に切り出した。「来月、時計は外されることになりました」老人はしばらく手を止め、それから「そうですか」とだけ答えた。驚いた様子は、少しも見せなかった。

その日、岩田はいつもより長くホームに留まっていた。日が傾き、電車を待つ客がまばらになった頃、彼はぽつりと言った。「この時計は、わざと二分遅らせてあるんです」宮下は耳を疑った。

「昔、ここは今よりずっと本数の多い駅でした。仕事終わりに走ってくる人間が、いつも何人かいましてね」岩田は時計を見上げながら続けた。「発車の二分前に間に合えば、乗れる。だから、この時計だけ、時刻表より二分遅く見えるようにしてあるんです」

宮下は思わず尋ねた。「でも、それでは正確じゃないですよ。安全上、問題になりませんか」岩田は初めて微笑んだ。「規則には反しています。だから誰にも言わずにいました。あなたが最初に気づいた人ですよ」

それから岩田は、若い頃の話の少しだけした。子どもの頃に父親を亡くし、母親が女手一つで彼を育てたこと。母親は毎晩、最終電車に駆け込むようにして帰ってきたこと。「あの二分がなければ、うちは終電に乗れない夜が、何度もあったはずですよ」

「時計は正しくなければならぬ、と教わりました。仕事でもそう習いました」と岩田は続けた。「でも、正しさだけでは、間に合わない人がいる。私はただ、その二分を、この駅にだけ残しておきたかったんです」

宮下はしばらく何も言えなかった。撤去の決定は変わらないだろう。だが、目の前の老人が守ってきたものの正体を、ようやく理解した気がした。それは時刻ではなく、間に合わなかった人への、小さな詫びのようなものだった。

撤去の当日、業者の作業員たちが時計を壁から下ろす間、岩田は少し離れた場所に立って、それを見ていた。表情は変わらなかったが、時計が外された瞬間、彼は小さく一礼した。誰に向けたものか、宮下にはわからなかった。

新しい電光掲示板が据え付けられ、数字は寸分の狂いもなく時を示すようになった。宮下はそれを見上げるたびに、なぜか物足りなさを覚えた。正しいはずのその数字には、誰かを待つ気配がなかった。

半年後、岩田が亡くなったという知らせが、駅にひっそりと届いた。宮下は葬儀の帰り、遺品のひとつだという古い懐中時計を、遺族から手渡された。針は、やはり二分遅れたまま止まっていた。

宮下はその時計を自分の机の引き出しにしまい、それから、ある夜だけこっそりと構内放送のアナウンスのタイミングを二分遅らせてみた。規則違反であることは、わかっていた。それでも、誰かが走ってくるかもしれない夜に、間に合わせてやりたいと思った。

OQOU STARTER LIBRARY

This story is from oqou's free starter library, graded at C1 for Japanese readers.

Read it interactively in the oqou app: tap any word for an instant translation, listen with natural narration, and carry your saved vocabulary into every story you read next.

oqou.app

[Download oqou on the App Store](#)

oqou •